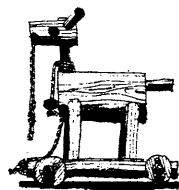


幼児の人格の発達と保育上の問題点 (一)



帆 足 喜 与 子

表題のようなテーマを考えていくふうのいき方では、まず人格の要素とか成り立ちを解明して、原理的なはなしをしてのち、故に人間はこういうふうに育っていくものであり、こうなくてはいけないという結論がくることになるようである。

ところが考えてみると、それを専門に勉強している当の書き手や読者にはいいが、大多数のべつの分野を専攻している人は、原理をさきに説かれると、ききなれない用語や叙述をひとつひとつたぐように頭に入れながら理解していくのについてやすエネルギ―で精いっぱい、ほんとうに必要な実用編のころには息ぎれがしてしまふ。

私が他の分野、たとえば建築のはなしを何かの参考に必要で読むときのことを考えると、まず私自身実際活動において役立つ知識を与えてもらって、その後にはそれはこういう原理にもとづくからであるといってもらった方が最後まで威勢よく話がきけそうである。

そこで本稿では、子どもはどういうふうになったらいいか、どういうのをよい人格とかをまっさきにズバリ掲げて、そのあとで人格形成の過程や人格の構成を説明しようとおもう。

一 よい人格の規準

よい人格（パーソナリティ）とはどんなのをいうか、どうい
のをいい子とかということでも議論すると、おそらく各人の好
みで、やさしい子をいい子としたり、正直な子をいい子とし
たり、また気持の良い人間をいい人としたりして、おのおのの人生
観や趣味を反映した判断が出てくる。

また実際に教育の場面で現象として教師の眼前にせまってくる
のも子どものそういった特性であって、よい特性はのびし、わる
い特性は廃棄するなり、形をかえて社会に受けいれられるよう
に、何らか生産的な意味をもつように指導しなければならぬとい
うことになるわけである。

だが特性というあらわれの奥で、人間といういわば一つの機械
がはたらいていることが推定され、そのはたらきのよき、わるき
が問題になる。機械がどのような種のはたらきをするかは、特性
の問題にあたる。それに対して、よいはたらき、効果的な性能を
もつということは、どんな機械にも必須の要件である。つまり、

人間はいろいろな特徴を顕現するわけだが、総括してそれがフル
の効果を発揮するように回転しなければならぬ。人間をよく回
転させるにはどうしたらいいかがわかれば、人々は教育の方法や
指針についての、一般的普遍の見解をもちうることになるとおも
うのである。

パーソナリティ学者はよく、自己実現ということを用いて、つま
り自分をフルに発揮することである。自分だけの自分を発揮する
のはあたり前だとおもいたくなるが、実は人間は環境のいろいろ
な条件にきまたげられると、その圧力にまけて自分をあらわすこ
とができなくなってしまう。それどころか、ぼんやりしていたら
環境に押しつぶされてしまう。生まれたとたんから、まわりの人
間が無用のおせっかいをして、赤ん坊の自己実現はすでにきま
げられはじめることだって大いにありうる。

自分が自分を発揮することは、自分をつかまえることと、表裏
をなす。自己発揮の連続が環境に対立して際立つ強い自分(自我)
を育てあげてゆく。そうしてできてゆく自我は固定した飾りもの
ではなくて、ますますさかんに活動する自我、環境に対してここ
らからはたらきかける自我である。

そこでコントロールという概念があらわれてくる。たとえば自動車が目のため役に役立つように走るには、暴走するのではなくて、めざす地点にむかって乗物としての要請をできる限り多くよくみたしつ、走ることである。それには、自動車の確にコントロールされなければならない。同じように、人間も衝動を暴発暴走させるのではなくて、コントロールできなければならない。自動車においては運転手が、コントロールされるべくできている車に手を下してそれをおこなうが、人間においては、自分が自分をコントロールする。子どもは環境の中にあつてどういふふうにかつを学習してゆくのが人間形成だということになる。

従来、特に東洋的な考え方の特徴として、人間形成において、「しつけ」の面がクローズアップされていた。すなわちいわく、こういう場面においてはこういう動作をすべし、いわくいわくいちいちきめられたフォームが身につかなければいけないといった考え方である。過去においてはばかりではない。現在においても、何かと自主的らしい口吻がもたらされながら、根本にはこの考え方が支配している。つまり外からの要請の提示、本人からいえ

ば外からの指令にこたえて、相手の顔をみながらそのとおりにする、これがいいのだという考え方である。

私は幼児期の教育として重要視されている「しつけ」を「コントロールの学習」というすがたに変える必要を痛感する。静的に折目をつけ、ハイできましたといった感じの人間形成でなく、立体的でダイナミックで、子ども自身みずからの発意にもとづいて、環境にそぐうように自分を運転する性能を培う教育、これである。

「しつけ」の教育では、とかく教育者が自分の指示どおりに子どもを動かそうとし、子どもの方はたえずチラチラとおとなの顔色をみながら従い、教育者のおもわくどおりにことがはこべば、教育者はよしよしとばかり満足する。これでは、一個の人格たる子どもに対して失礼ではないだろうか。

子どもの行動がどのように展開し、どんな形をとっていかかは、むしろ他人たる教師は知らない方がほんとうだろう。子どもを自分をコントロールできるように方向づけただけしてやって、あとはそれぞれの子どもの傾向性に応じておもむくすがたをみて、子ども発見のよろこびにひたつていければいいと私はおもっている。何も教育者は自分がいいことをしたとおもうために、また、

おもわれるために教育するのではない。もしそれがいいことだとすれば、それはそのこと自身のためである。

よく幼稚園の先生に、子どものめんどろをみすぎないようにしたらどうだろうと話すと、かならずみんなの頭にひらめく第一のことは、たしかにそれはいいことだけれど、そうするとお母さんが先生は冷たいとおもうだろうから結局できない、ということのようである。

一ヶ所の幼稚園のみならず、いいあわせたように、みんなお母さんの目を気にしている。つまりお宅のお子さんのことをこんなに考えていますという暖かいジェスチャーを示すことによって、母と教師はふんいき的につながるのである。これが日本のすがたである。日本ではみんながなれあっていないと安心できないといったところがある。

さらに蛇足ながらつけ加えさせていただくと、被教育者の自発性にまかせて、彼らがのびのびと前進し、教師のおもわくを超えたことをしたばあい、たとえそれがいいことであろうと、従来の静的わく組教育を好む人たちは、自分が弟子においこされたような、もしくは自分に無礼でもしかけられたような不合理な気持ちにおそわれるのではないかと推量する。しかしどう考えても、あな

たのおっしゃるとおりになりました、という顔付をした生徒に仰ぐれ先生はよしよしと満足するといった関係は、よどみがあつて前進的でない。こういった心持は、人格形成理論から導き出されてこない無縁のものである。それどころか人格形成を妨げることにはかならないのである。

ところで、適応という語はこのごろ誰の耳にも親しいものになつてきた。人格形成とは何かを、いろいろないい方で述べることもできるが、適応性を身につけていくことであると表現することもできるのであつて、私も本稿のはじめからその文脈において語つてきているのである。

適応といえば、まわりの環境、まわりの人々に対する適応のこととがすぐ頭にくるが、もう一つ、自分自身への適応、すなわち自己内適応という重要な問題がある。まわりに対する適応も自分自身への適応とおしてなされるのである。自分自身への適応としていろいろな例をあげることができようが、たとえば、自分は絵がへただとすると、まわりの人をみてうまくなろうとあせるのは、自分自身への適応ができていない証拠である。へたならへたの自分を受けいれ、自分なりのレベルでせいっぱいのことをして満足するのがいいのである。動作ののろい人は、他人の機敏さ

におどろいて茫然としないで、のろいペースで自分なりの方式をうちたてればよい。

そうなると、さきにコントロールについて述べたことにたちもどるとよくわかるのだが、自分を運転するには、自分の事情が基盤にならなければならないのである。自分の内部事情は、体が弱いとか、頭がよくないとかいいとか、神経質だとかがいろいろからみあっている。おのおのすべて他人と異なり特異的であるので、各人が種々の内部事情をかみあわせて生かして行動すれば、おのおのは個性的になる。「しつけ」という画一的な規準に注目するよりも、各人が自分をコントロールするという規準を人格形成のめあてにした方がよいわけである。

自分をコントロールできれば、その時々々の場面に對して適切な行動ができるのだから、しつけのこころと矛盾するものでない。

もうひとつ、パーソナリティ研究領域でとりあつかわれる語に成熟がある。成熟とは、ふつう青年期またはおとなに関連して言及される語であるが、一方各発達段階においてそれぞれに十分な発達が示されているようすもまた成熟と形容されるのである。

二〇歳になりながら二〇歳として期待されているだけの精神程度

を示さない青年より、五歳でも五歳としての発達をフルにあらわし、精神のバランスがとれていればこの方が成熟しているといえるのである。だから人格形成は最終に決勝点があるのではなく、いわば日々その人その人の成熟が期待されているわけである。

各年齢段階において成熟を示すパーソナリティこそ健全なパーソナリティとよばれる。エリクソンは、各年齢段階のよいパーソナリティとしてあるべき規準を次のように規定している。

乳児期	根底的な信頼感
幼児初期	自律性
遊びの時期	自発性
学業期	精励と有能性
青年期	自覚
成人初期	親愛
成人期	子孫育成
成熟期	完成と受容

今後、さらに二回にわたる本稿で、たんに幼児期の人格形成に主眼点をおくわけだが、見とおしとして、幼児はやがてどのような学童となり、青年となり、おとなになるはずか、またなるべきかは当然現在の問題と直接につらなる。

(川村短期大学)